

## 2021年9月NHK四国地方放送番組審議会

9月のNHK四国地方放送番組審議会は、13日(月)、松山拠点放送局において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、事前に視聴してもらった「柏島～海と人がつむぐ命の物語～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、10月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	半井 真司	(四国旅客鉄道代表取締役会長)
副委員長	三好 賢治	(伊予銀行代表取締役頭取)
委員	小松 圭子	(有限会社はたやま夢楽代表取締役社長)
	田井ノエル	(小説家)
	床桜 英二	(徳島文理大学総合政策学部教授)
	土佐 礼子	(三井住友海上火災保険陸上競技部 プレーイングアドバイザー)
	滑川 里香	(一般社団法人マチのコトバ徳島代表理事)
	西本 佳代	(香川大学大学教育基盤センター准教授)
	村上健太郎	(特定非営利活動法人NPO砂浜美術館理事長)

### (主な発言)

<「柏島～海と人がつむぐ命の物語～」(総合 8月13日(金)放送)について>

- 沖縄から移り住む人もいる柏島の1,000種を超える魚種の映像を楽しむことができた。なぜこんなに魚種が豊富なのかについても触れていてよかった。一方で、わずか30年で海の環境に大きな変化があり、「ほったらかしにしたら、すぐにだめになると思う」というダイビングガイドの松野和志さんのことには重みがあった。柏島で食堂を営む島本きみさんは、テングサを「柏島の草」と表現していたが、「この草でみんな生活した」ということには、タイトルである「海と人がつむぐ命の物語」に通じるものがあった。身近な環境変化の大きな要因が「地球温暖化」であり、番組でも海水温上昇について触れていた。海だけに限らず、環境変化は私たちの手にゆだねられ

ていることを考えると、自然の恵みとともに環境問題を考える番組を、これからも積極的に発信してほしい。

- 柏島の美しさや魚影の濃さ、多様な生命の営みを感じることができた。海水温の上昇により、生態系に様々な変化がもたらされていることがよく分かった。松野さんの、海の環境は「ほったらかしにしていたら、だめになる」ということばが印象に残った。1990年代と現在の海中を比較する映像があったが、明らかに背の高い海藻が激減していた。海中を映像として記録することがなければ、多くの人に伝えることができないことから、記録する大切さを改めて感じた。島本さんの、島の食堂を「命がある限り続ける」ということばに彼女の生きざまを感じた。番組全体を通して、海に支えられ、海とともに生きる柏島の人々の様子が描かれていると感じた。今後も追いつけてほしい。番組のタイトルは、柏島の海の色やさんご礁が描かれていて、とてもかわいらしかった。
  
- 柏島の海に生息する多種多様な生き物や、見事なさんご礁を、鮮明な映像を通じて楽しむことができた。美しい海の生態系のバランスが水温の上昇などによって崩れてきていることへの警鐘と、なんとか守ろうとしている柏島の人々の営みも伝えようとしていた。アオリイカの産卵場の再生については、海洋環境の変化の原因を海水温の上昇としていたが、本当にそれだけが原因なのか、いつごろからそのような現象が現れ、人々はどのように話し合い、環境保全の活動を始めたのか、どのような課題にぶつかっているのかななどを、もう少し丁寧に掘り下げてほしかった。伝統のところてんについて、材料のテングサが柏島で採れなくなり、今は室戸産を使っていると紹介されていたが、「よそのものはつかいたくない」という店主が、室戸産に切り替えるまでのプロセスや悩みをもっと掘り下げてほしかった。限られた時間内に、すばらしい海の自然の紹介と、海洋環境の変化に人々が懸命に対処している姿の両方を押し込めようとしたところに少し無理があった気がした。
  
- 全体的に和やかで癒やされる雰囲気非常に好ましかった。環境の変化や、それに対応する人々の姿も取り上げており、構成はバランスが絶妙にとれていたと思う。最初の映像が美しく引き込まれた。高橋メアリージュンさんの穏やかなナレーションで、番組の方向性が理解しやすかった。アオリイカの産卵場を作った松野さんは「人間のエゴかも」と言っていたが、人々の営みや島の心を守るのは大事なことだと思う。コロナ禍で私たちの生活は変わってしまったが、元の生活を取り戻そうとしている現状とリンクしていると感じた。テングサの産地を変えたところてんの味がどうなったのか気になった。室戸のテングサは柏島の味に近いのだろうか。色は随分と違って見えた。

- 最も印象的だったのは、柏島の海の美しさだった。澄んだ海に、1,000種を超えるという、色とりどりの魚とさんご礁が広がっていて、見ていて飽きない映像だった。新型コロナウイルスの影響でレジャーを自粛しているので、ダイビングを疑似体験できてよかった。高橋メアリージュンさんのナレーションもよかった。番組の軽やかな部分と深みを両方表現できる適切な人選だったと感じた。画面に表示されるタイトルの色使いや、柏島の部分にさんごが描かれていることも、かわいらしくてよかった。「海と人がつむぐ命の物語」というサブタイトルは気になった。番組内でアオリイカの産卵場の再生に対して「人間のエゴも感じる」という発言があったように、人がつむぐという表現は場当たりのと思われ、「海と人」というように併記はできないのではないかと感じた。また、25分番組であれば、美しい海とその変化に内容を絞り、問題解決型の番組は別に制作してもよかったのではないかと思った。
- 以前から柏島の名前はよく聞いており、親近感を持って視聴した。新型コロナウイルス関連の放送が多い中で、ほっとする番組だった。25分という短い時間の中で、単にきれいな場所として終えるだけでなく、柏島が抱える問題も複数取り上げていた。また、それに向き合う人々の思いや活動も紹介されていて見応えがあった。柏島の周囲には似たような美しい地域があるが、なぜ柏島にだけスポットが当たったのかを知りたいと思った。海水温の上昇や磯焼けの問題は、どこの漁村でも抱える問題で、解決への取り組みを長年、続けているところも多いと思う。松野さんが、こうした取り組みについて「人間のエゴを感じる」と述べていて、現場で生きる人の葛藤も感じられた。
- NHKらしさが存分に出た見応えのあるすばらしい番組だった。水中での撮影は本当に大変だったと思う。アオリイカの産卵の瞬間には思わず、感嘆の声をあげてしまうほどだった。更に、きれいな海の映像の紹介だけで終わるのではなく、その地域の人たちの思いや取り組みを関連づけたのが非常によかった。アオリイカの産卵場所の再生は、とても衝撃的で、地域の子供たちと一緒に取り組んでいることは本当にすばらしいと思った。タイトルの「命をつむぐ」瞬間を見ることができて感動的だった。島本さんが、地元の海でテングサが採れなくなって、室戸のテングサを使うことになり、戸惑いながらところてんを作る場面では、本人の葛藤が映像として捉えられていた。地域に住む人たちの海に対しての思いと問題に取り組む姿勢を合わせて一つの番組にしたことで、非常に見応えがあって印象に残る番組だった。
- 柏島の特徴や魅力が、美しい映像に、データや移住者のインタビューを交えてコンパクトに解説されていて、知識がない視聴者にとっても興味をひかれる内容だった。

番組では、地球温暖化による海水温の上昇、ところてんの原料となるテングサの枯渇、アオリイカの産卵場所の荒廃など厳しい現実が紹介されていた。地球温暖化が豪雨などの大きな自然災害をもたらすだけでなく、柏島という身近なところの環境にも深刻な影響を生み出しているということを改めて認識する機会になったのではないか。また、島の環境を少しでも維持して回復しようという島民の努力も、しっかり取材がされていた。その中で、「人間のエゴかもしれない」、「ほったらかしにしたらいけない」、「命があるかぎり続けていく」という発言は非常に印象的だった。視聴者が環境問題に関して、少しずつでも取り組むきっかけにしろという意味でも、こうした身近な事例を定期的に伝えていくことを期待したい。

- あまりなじみのない魚やイカの生態を紹介し、産卵やふ化の瞬間をしっかりと映像化できていたことは、丹念な取材撮影によるもので大変よかった。サブタイトルの「海と人をつむぐ命の物語」から想像した内容に比べて、人の営みの部分が若干少なかったが、3人の出演者のメッセージをうまく引き出せていて、今の島の風景を次の世代に残していきたいという島の人の強い意志が伝わってきた。一方で、海水温上昇と海藻の消滅など海中の環境変化がどういう関係にあるのか、魚類の生態系には影響が出ていないかなどの点についても説明が必要だったと思う。海水温上昇などの環境問題に対して、どのように行動して行くべきか視聴者に問いかけがあってもよかったのではないか。
- 魚の美しさと海水の透明感に驚かされた。色鮮やかな魚などが、たくさん集まっている映像は感動した。近年、水温の上昇などの環境変化によって、島の40年以上の名物である「ところてん」のテングサが取れなくなった事実を通して、環境問題に対する危機感が分かりやすく伝わってきた。島本さんの、お店の紹介や表情がうまく捉えられていて、なじみ客に室戸産のテングサのところてんを贈る場面や、「命がある限り、草がある限り続ける」というコメントからは、島本さんの気持ちが伝わった。海藻が姿を消し、アオリイカが減った事実と、対策に取り組む島民が紹介されていた。木の枝を海藻の代わりに使って産卵が成功した場面は未来への希望が湧いた。アオリイカの稚魚が卵から飛び出す瞬間の映像と「次の世代のために産卵しているように、僕らも次の時代の人たちに残していきたい」という松野さんのメッセージから自然を守らなければならないと思える番組だった。島と海の夜景の映像もとてもきれいだった。

(NHK側)

今回の番組は、環境問題を声高に叫ぶのではなく、柏島の人たちと海とのつながりや生息している魚を淡々と描いていく中から、そこに横たわる問題を浮き彫りにしていくことを目指して作り始めた。

海洋環境の変化については、原因と結果の因果関係については、学説もさまざまであり、結びつけて言い切りづらい。そのため、この100年で水温が1.24度上昇したというデータや、海藻が減ったことなど、「事実を言う」までにとどめ、因果関係についてはあえて言及しなかった。それでも十分にメッセージは伝わると考えたからだが、環境に関する問題の伝え方についてご指摘いただいた点は、今後の番組制作の参考にしていきたい。

#### <放送番組一般について>

- 8月17日(火)放送のクローズアップ現代+「新型コロナ重症者病棟“負のスパイラル”が招く危機」は、東京オリンピックが開催されているなかで、第5波の猛威にさらされている医療現場の実態を報告した番組だったと思う。オリンピック直前から医療崩壊目前の放送日当日までの、病院の努力と苦悩がよく理解できた。重症者の急増状況やデルタ株の脅威もよく伝わってきた。新型コロナウイルスの後遺症や妊婦の感染問題にも触れていて、改めて個人の感染予防対策の重要性を認識した。今後も継続して、医療現場の実態を報告してもらいたい。8月10日(火)に放送されたフェイク・バスターズ「新型コロナワクチンと誤情報」(総合 後10:00~10:45)もタイムリーだった。ワクチンによって不妊になるという情報に関するツイートから発信源を特定し、不確かな情報であるということを検証するという取り組みはすばらしいと思った。フィルターバブルに陥る理由や、そこから脱出する方法、正しい情報を発信する取り組みなどが紹介されていて、大変有益な番組だった。
- 8月は豪雨が続いたので、テレビで伝えられるニュースや気象警報だけでなく、NHKのニュース・防災アプリも注視しながら過ごした。台風シーズンに入るのも積極的に活用していきたい。
- 東京2020オリンピック・パラリンピックを見た。NHKの競技実況の中で、一番よかったのがスケートボードだった。新しい競技ということもあり、解説がフランクで、それに合わせてアナウンサーのテンションが上がっていく様子が非常に好ましかった。開会式と閉会式では、解説が少なく、ここで解説がほしかったという場面が非常に多かった。市川海老蔵さんの睨みの意味は、普段から歌舞伎を見ていない人にとっては分かりづらいのではないかと。こうした場面に効果的な解説があれば、違った印象を与えたのではないかと思ひ残念だった。

- 東京オリンピック・パラリンピックは盛り上がったと思うし、私も放送を楽しめた。ただ、スタジオのキャスターの扱いについて違和感を覚える場面があった。試合の直前に、メインキャスターの元水泳選手が話していたが、ゲストの元プロ野球選手に、これから始まる試合について専門的な視点で詳しく解説してもらいたい場面だと思った。視聴者が何を求めているのか、どういうことばを求めているのか、どういう解説を求めているのかを、視聴者目線で考えてほしいと思った。
- 東京オリンピック・パラリンピックは、無観客の中で、選手がどのようにテンションやモチベーションを上げていくか、最高のパフォーマンスができるのかが気になっていたが、選手の戦いぶりを見てアスリートとしての姿勢に非常に感動した。女子マラソンは前日に、スタートが1時間早まるということが決まるという異例の事態も起きて、放送も大変だったと思うが、きちんと伝えられてよかったと思う。見逃し配信は様々な競技が観戦でき、活用した。
- NHKには、「ハートネットTV」や「バリバラ」など、多様性について考える機会を提供するすばらしい番組がある。多様性については、大事だと伝えておけばよいという段階をすぎていると感じており、東京パラリンピックの放送を不安と期待を抱きながら視聴したが、結果としてとてもよい出来だった。特にデイリーハイライトがよかった。出演者が自分のことばで、その競技や選手の魅力を伝えていた。今回のパラリンピックとその報道は、視聴者に考えるきっかけを与えたと思う。今後もそのきっかけを育てるような番組制作を意識してほしい。
- 東京オリンピック・パラリンピックを放送する重要性は理解しているが、その一方で、地域番組が縮小されたことには疑問を感じた。オリンピック・パラリンピックの期間中、夕方に放送している「とく6徳島」が縮小され、地域のニュース時間が非常に短くなった。一方で、民放は通常どおり午後6時15分から放送していた。徳島県民に徳島の情報を発信することは極めて重要であり、総合だけでなくEテレも含めて、うまく編成して発信してもらいたい。
- 9月10日(金)の四国らしんばん「あかりの消えない教室 ～高知・朝倉夜間中学校～」を見た。こうした公設民営の夜間中学というのは、全国でも珍しいそうで、大学生が勉強を教えて、運営する山下實さんが学びの環境作りをしていた。中学校という名前はついてはいるが、高校生から二十歳ぐらいの生徒もいて、多種多様な人がいることが印象的だった。経済的な事情や、家庭に問題のある生徒が多く、家や学校以外の居場所作りに山下さんが貢献していて、本当にままならない人に手を差し伸べる姿が、ひたむきで印象に残った。

- 同じく9月10日(金)の「四国らしんばん」を見た。タイトルにふさわしい内容の濃い番組だった。ただ、中学校と言いながら小学生が通っているなど、すっきり理解できない部分があった。朝倉夜間中学校がどういう経緯でできて、どのようなミッションを持って運営されているかという説明をするべきだったと思う。初めて見る人にとっても理解できるよう前提の説明があってしかるべきだった。
- 同じく9月10日(金)の「四国らしんばん」を見た。20年以上前から活動を続けていた朝倉夜間中学校の存在は知らなかった。学びの環境作りが、夜間中学校という建物の枠を越えて、通う人たちの家庭生活にも深く入るケースや、児童相談所と連携するなど、幅広い活動を行っていたことに驚いた。代表の山下さんが、やり直しはできると言っていたが、このことばにとっても胸が熱くなった。実践する者こそが発することばの強さであると感じた。一方で、限られた番組時間ではあるが、夜間中学校自体の明かりが消えないように運営のあり方や費用負担などについて、もう少し踏み込んで放送してほしかった。
- 9月12日(日)のNHKスペシャル「MEGAQUAKE 巨大地震 2021～震災10年 科学はどこまで迫れたか～」を見た。AIを使ったデータ予測やスーパーコンピューターを使ったデータ分析など、現在の科学技術の高さを知ることができた。巨大地震の前触れをつかむ手法が具体的に示されていたが、事前の防災につながる技術だと思った。GPSを使いながらミリ単位でプレートのひずみを読んで、地震が起こる可能性を局地的にある程度予測できることにも驚かされた。中国が人工衛星で電離層を観測して地震予知につながる科学データを収集していることも紹介されていて、科学技術の発展ぶりに驚かされた。再び視聴したくなる内容だった。
- 9月13日(月)の「ワルイコあつまれ」(Eテレ 前8:25～8:55)は、予告が一切なく始まった。「慎吾ママ」というワードがトレンドになるなどSNSで大きな注目を集めたようだ。真面目なイメージのあるNHKが、よい意味で突拍子もないチャレンジだった。実験的なものだと思うが取り組みを絶賛したい。

NHK松山拠点放送局  
番組審議会事務局